



●海外の報道が浮き彫りにした二つの事柄

2011年は「東日本大震災」のあった年として、歴史上の記録としても、また私どものこころの記憶としても、長く残るものとなりました。2011年3月11日、午後2時46分、M9.0という未曾有の大地震でした。巨大な津波は東北太平洋側の沿岸を一時のうちに飲み込んだのです。テレビで放映された津波の映像は、忘れかけていた天災の猛威を遺憾なく私どもに突きつけました。続いて発生した原発事故は、私たちが意識することもなく暮らすようになっていた現代人のライフスタイルを、根底から見直す契機となりました。私どもの関連している多くの医学関連の学会等の行事は、中止や延期を余儀なくされました。

海外から見た東日本大震災に関するマスコミの報道は、二つのことを浮き彫りにしたように思います。一つは、日本政府の危機管理に関する意思決定と対応の遅れでした。平和なときにはうまく機能するわが国の合意を得る方法は、緊急の危機状況では機能しないことが、世界が注視する中で明らかに示されたわけです。もう一つは、日本人の美徳ともいえる特質が明らかと

なかの・しげゆき 岡山大学医学部



卒。スタンフォード大学医学部臨床薬理学部門に留学。大分医科大学臨床薬理学教授、同附属病院臨床薬理センター長、大分大学医学部附属病院長、大分大学学長補佐などを歴任。大分大学名誉教授。大分大学医学部創薬育薬医学教授、国際医療福祉大学大学院教授を経て現職。日本臨床薬理学会名誉会員(元理事長)、日本臨床精神神経薬理学会名誉会員(元会長)、日本学術会議連携委員、日本心身医学会認定医・指導医、日本臨床薬理学会専門医・指導医、日本内科学会認定医、臨床試験支援財団理事長。響き合いネットワーク連絡協議会理事長として、医療コミュニケーションを学ぶ全国的なワークショップ(大分、岡山、東京、長崎、山形、湯布院)の企画・運営に携わっている。
http://www.med.oita-u.ac.jp/pharmaceutical_medicine/index.html

なり、世界中がこれに驚嘆の声を上げたことです。今回は、後者の、東日本大震災で見直された「日本人のこころ」の特質について語ってみたいと思います。

●コントロールできないことを克服していくための冷静な決意

「津波」はすでに「Tsunami」という表現法で海外でも知られていましたが、大震災と津波で大きな被害を受けながらも、その中で示された日本人の我慢強さが国際的に注目され、「我慢(ガマン)」がローマ字で「Gaman」と記述されるようになりました。「ガマン」を英語でenduranceと訳してもどうもピンとこない、つまり、日本人の「ガマン」は、英語のpatience, endurance, perseveranceなどが合わさったもののようなのです。そして、この「ガマン」を理解できて初めて、第二次世界大戦の荒廃から劇的に回復した日本の秘密が分かる、というわけです。

阪神淡路大震災のとき、ニューヨーク・タイムズの東京支局長として震災を報道したニコラス・クリストフ氏は、日本人の「我慢」強さに感銘を受け、「ガマンする」を「toughing it out(耐え抜くこと)」と「ニューヨーク・タイムズ」のコラムに書いたそうです。

「私は、日本政府は透明性がないなど、日本に対して批判的な意見を述べてきたことで知られているが、市民の共通の利益のために『ガマン』する精神は日本人のもっともよい面で、自分の利益を差し置いてガマンする精神は、アメリカ人も見習うべきだと思う……」

そして、その理由の一つとして、人間と自然の関係にまで考察を進めています。つまり、アメリカ人は自分たちを自然と対立するものと考え、自然を支配しようとするが、日本人はこれとは対照的に、人間は自然の一部でしかないので、その流れには逆らわず、流れ

に従うものだと考えている、というわけです。日本には明治になるまでは「自然」という言葉そのものがなかったことから分かるように、「自然」を対象としては見てこなかったで、「自然」を表現する言葉も必要ではなかったのかもしれないのです。

「ガマン」の次によく使われた言葉が、「シカタガナイ」(Shikataganai)であったといえます。「シカタガナイ」は「It cannot be helped」「What can you do?」「It's beyond our control」「It's out of my hands」「There is nothing you can do」などと訳されていますが、日本人をよく知るようになると、どこかニュアンスが違うというわけです。「シカタガナイ」は日本人特有の心理で、この言葉で表される内容は、人生の予想できない変化に対する無力感だけを意味しているのではなく、コントロールできないことを克服していくという冷静な決意をも意味していると感じられています。そこで、「シカタガナイ」を「Shikataganai」と書くようになったのです。

●日本人のこころの底にあるもの

東日本大震災で海外の人たちに注目されるようになった、日本人の「ガマン」強さと「シカタガナイ」という言葉に代表される、運命を受け入れるこころ、みんなで助け合おうとする仲間意識、秩序を乱さないことを大切にすること、感情を抑制するこころなどは、私どもがこれからもずっと大切にしていきたい「日本人の美徳」です。日本人のみんなが、心の底に持っている「大和魂」のようなものなのでしょう。また、緊急時における日本人の弱いリーダーシップと強力な社会的結束は、実は同じコインの表と裏の関係になっていて、民衆を結束させている力と同じ力が、強力なリーダーの出現に対して懐疑的にさせるも

のになっているのかもしれない。

ここで思い出すのは、ケニア出身の女性環境保護活動家で、2004年にノーベル平和賞を受賞したワンガリ・マータイ氏(1940年-2011年)が世界に広めた「もったいない」(Mottainai)という言葉です。彼女が「もったいない」と出会ったのは、2005年に京都議定書関連行事のために日本を訪問したときですが、「もったいない」に感銘を受け、これに該当する言葉をいろいろと探してはみたものの、「もったいない」のように、自然や物に対する敬意や愛の込められている言葉がほかに見つからなかったで、「Mottainai」を世界共通の言葉として広めることにしましたといえます。消費削減(リデュース)、再利用(リユース)、再生利用(リサイクル)、尊敬(リスペクト)の概念を一語で表せる言葉として、「Mottainai」を「日本人の知恵」として紹介しています。

災害の際に限らず、人生の苦しいときにこそ人間の真価が問われます。苦しいときこそ正念場なのです。と同時に、逆にうまくいっているとき、絶好調のときにも、その人の真価が問われることにも心しておく必要があります。決して奢ることなく、感謝の気持ちを忘れずに過ごしたいものです。

各地で開催している医療コミュニケーションのワークショップや、今年の秋から九州南端に近い指宿の地で新たに始めた、がん患者とその家族の方々と一緒に語り合う時間「響き合いトークセッション」の場で、上記のようなお話をしたところ、思いのほか共感される方々が多く、日本人のこころの底にあるものを再確認した思いがしています。2011年の「今年の漢字」として、災、震、波などを越えて、「絆」に票が集まったのも、日本人の同じこころの根っ子から出たものなのではないでしょうか。